

2015年度第25回日本家族社会学会大会

2015年度の日本家族社会学会大会は、9月5日（土）～6日（日）の2日間にわたり、追手門学院大学（大阪府茨木市）にて開催された。1日目には自由報告の他、国際セッション“Work-Family Balance of Families with Small Children: How to Achieve Gender Equality in Parenting”，企画全体提案型テーマセッション「NFRJ18に向けて」が設けられた。後者のテーマセッションにおける「NFRJにおける回顧調査の可能性」（保田時男）は、パネルデータをパネル調査ではなく回顧調査によって収集する可能性について議論したものであり、当研究所の調査研究プロジェクトにとっても示唆に富んだものであった。

2日目の午後にはシンポジウム「人口減少社会における家族と地域のゆくえ」が開催され、「日本の人口転換と地域社会の未来」（原俊彦）、「地域ブロック内における出生率の違い—富山と福井の比較から—」（中村真由美）、「人口減少時代の地域づくりと自治体行財政の課題」（沼尾波子）の3報告がなされた。その題目からも分かるとおり、今年度のシンポジウムは人口学と家族社会学の両領域にまたがるものであり、登壇者とフロアとの間で活発な議論が交わされた。

自由報告では、「①『家族』とは何か」、「②家族・情緒・性」、「③国際的移動への適応と家族」、「④現代の結婚」、「⑤家族と社会政策」、「⑥家族意識」、「⑦育児とストレス」、「⑧ひとり親家族とステップファミリー」、「⑨ライフコースと親子関係」、「⑩出産と育児」、「⑪家族・親族システムの地域性」の11セッションで計42本の報告があった。方法論に着目すると、計量的な研究よりもインタビュー・フィールドワーク・資料分析などに立脚したものが多く印象を受けた。（余田翔平 記）

第11回スーパーセンテナリアンワークショップ

平成27年9月7～8日、デンマーク・コペンハーゲンの国立公衆衛生研究所（National Institute of Public Health）において、第11回スーパーセンテナリアンワークショップ（11th Supercentenarian Workshop）が開催された。このワークショップは、百十歳を超える超百寿者に関心を持つ研究者によって行われてきているものであり、日本からは長らく齋藤安彦日本大学教授が中心的な役割を担ってこられたが、齋藤教授からのご紹介を頂き、今回、初めて当研究所から筆者が参加させて頂く機会を得た。

ワークショップはマックスプランク人口研究所のJames W. Vaupel氏らによる開会挨拶に始まり、2日間で8つのセッションが設けられ、研究報告と討論が行われた。最初の2つのセッションは本ワークショップの中心課題の一つともなっている、超高齢者の年齢確認に関するものであった。この中では特に日本の超百寿者として、本年117歳で亡くなった大川ミサヲ氏の年齢確認に関する研究が、大阪大学大学院の小園麻里菜氏により、権藤恭之准教授らとの共同研究の形で報告された。3番目のセッションは、このグループが作成している超高齢者のデータベースであるIDL（International Database on Longevity）についてであり、その現状等が報告された。4～6番目のセッションは米国・日本・欧州における超百寿者等のデータの現状に関するものであり、日本については、齋藤安彦教授、フランス国立衛生医学研究所 Jean-Marie Robine氏及び筆者が共同で、“Centenarians and Supercentenarians in Japan”との報告を行った。また、最後の2つのセッションはResearch Presentationと題され、様々な分析的研究等が報告された。

本研究グループは2010年に研究成果を書籍として刊行しているが、今後、新たな書籍の刊行に向けて研究を継続していくことが全てのセッション終了後の討議において確認され、2日間の予定を終えた。（石井 太 記）